

Sigmund Freud

Der Vater der Psychoanalyse

精神分析学の父、ジークムント・フロイト

9 9 k 1 0 5 5

船谷 華世子

目次

ジークムント・フロイト

1 . フロイトの思想と現代	1
2 . フロイトの生涯	1
誕生と家庭環境.....	1
母アマリエとフロイトの人格.....	3
少年時代と父との関係.....	6
大学時代とユダヤ人としてのフロイト.....	10
開業と結婚、そしてフロイトの死まで.....	13
3 . フロイトの理論とその発展.....	25
4 . 考察.....	30
5 . Sigmund Freud: Der Vater der Psychoanalyse.....	31
6 - 参考文献.....	33
参考ホームページ.....	34

ジークムント・フロイト

1．フロイトの思想と現代

まず最初に Sigmund Freud (ジークムント・フロイト)〔1856～1939〕とは、19 世紀末に精神分析を治療として確立した人物である。精神分析学を創始したことで、世界中に知られている。その点において彼は偉大な人物であることを疑問に思う人はいない。

しかし、現代ではフロイトの理論は古典とされ、その妥当性についても多くの点で疑問視されている。それにもかかわらずフロイトの思想や著作は、現代に生きる人々に大きな影響を与えている。フロイトの考え出した精神分析用語は、私達の会話にもしばしば用いられ日常の中にすっかり溶け込んでいる。それはつまりフロイトの思想は私達が思っているよりも、ずっと私達の思想に入り込んでいることを示している。

この論文では、なぜフロイトの思想が現代の人々に影響を与えるのかを、フロイトの生涯と彼の創始した精神分析学を通じて考察する。

2．フロイトの生涯

誕生と家庭環境

フロイトは 1856 年 5 月 6 日に、Mähren/Moravia (モラビア) 地方の小都市 Freiberg (フライベルク) で生まれた。現在でいえば Tschechien (チェコ共和国)

の Prbor (プシーボル) である。彼の誕生日には議論があり、戸籍上は 3 月 6 日になっているが、Ernest Jones (アーネスト・ジョーンズ)¹の伝記では 5 月 6 日になっている。どちらが正しいのかさだかではない。

フロイトの両親は共に生粋のユダヤ人で、父 Jacob Freud (ヤコブ・フロイト) [1815 ~ 1896] は当時毛織物商人をしていた。母 Amalie Freud (アマリエ・フロイト) [1835 ~ 1930] はその 2 人目の妻とも 3 人目の妻とも言われており、ヤコブよりも 20 歳も年下である。当時ヤコブは商売が上手くいっていたので、若い美貌の妻を娶ることができた。

フロイトは結婚 5 年目にしてやっと授かった子供で、彼の名前はモラビアの王で伝説の英雄ジークムントから付けたものである。そして彼の下には 5 人の妹と 1 人の弟がいる。しかし彼らフロイトの兄弟達はフロイトの自伝にも著作にも登場することはない。フロイトは他人の秘密を暴くことに躊躇いはなかったが、自らの私生活は公にしたがらなかったからである。ヤコブには先妻との間に二人の子供をもうけていたが、彼らはすでに自立をし家庭を持っていたので、フロイトはほとんど長男として扱われた。

¹ フロイトの弟子はほとんどがユダヤ人で、ジョーンズは数少ない例外の 1 人。彼の書いたフロイトの伝記は、最も詳細かつ信頼が置けるとされている。フィギア・スケートの達人で、フロイト救出のためにイギリス政府に陳情した際には、その人脈が役にたった。

母アマリエとフロイトの人格

アマリエはフロイトに大変に期待していたので、「私の宝物ジギちゃん(Mein Goldner Sigi)」と呼び非常に溺愛した。アマリエの愛情はフロイトの人格形成に大きな役割を果たした。

フロイトは大変な自信家であり、かつまた大変なマザー・コンプレックス(= 母親への深い固着²)の持ち主であった。後にフロイトは「母親のこの上なき寵愛をうけた人は、一生涯、征服者という感情、すなわちしばしば現実の成功をもたらす、成功への確信を持ち続ける」(『フロイトの使命』P. 21より引用)と語っている。つまり母親の疑う余地のない愛情がフロイトの自己への自身を育て、その自信がフロイトの才能を伸ばす力強い支持となったと言うのである。フロイトはこの様に述べているけれども、これはコインの裏表の表側だけを見ているようなもので、必ずしも真実ではない。

フロイトは自身もつ母親への強いマザー・コンプレックスのために、現代の精神分析では必ず語られ、虐待などの原因として社会的に問題になっている

² 発達の途上で心的な外傷を受けたり、あるいは過剰な満足が与えられたりすると、そこに固着が生じ、成長した後に挫折を経験する際、この固着点に退行がおこるとフロイトは考えた。この機制によってフロイトは、Karl Abraham(カール・アブラハム)とともに神経症の各病型及び躁鬱病、分裂病それぞれの固着点を明らかにし、精神分析的な精神病理学を展開した。

母子関係の激しい愛憎のアンビバレンス³を自覚することを無意識⁴に避けた。

フロイトは彼の母や、母親一般を普遍的な賛美の対象とする単なる便法でもって、彼女達を保護した。この点がフロイトの理論が過去のものであると、現代の人々に思われる原因の1つである。例えば「ある期間持続する二人の親密な感情関係は、全て愛と憎しみのアンビバレンスに付きまといられるが、母と息子の関係、そして飼い主と犬の関係だけは例外である。」(『フロイト思想のキーワード』P375より引用)などと、現代人なら首を傾げてしまいそうなことを語っている。

アマリエは大変気性の激しい女性で、フロイト家では「つむじ風」と呼ばれていた。それはアマリエが何某かの問題に首を突っ込むと、かならず一悶着が起ったということである。フロイトは激しい母のしつけやパワーあふれる圧

³ 同一の対象に対して、愛と憎しみの両面の情緒や態度を向ける心的な体験をいう。両価性と訳される。フロイトは、父親の死、あるいは原父殺害の際に起こる事後の従順と悔やみ、罪悪感、生前の父親に対して息子達が抱いていたアンビバレンスに由来するという。本来アンビバレンスはEugen Bleuler(オイゲン・ブローラー)の精神分裂病の心性を表す用語で、フロイトはこの用語を神経症ないし正常な人の情緒の両面性に用い、現在ではこの使い方が一般に普及している。

⁴ フロイトは無意識を、そのことについて意識していない心的な状態を意味する記述的な無意識、意識内容が抑圧されて無意識になる際のその内容が置かれる局所という意味での局所論的な無意識、また、このような抑圧の力と充足を求める欲動の力が葛藤する力動的な無意識、の3つの意味の無意識を定義した。

力による心の痛みや抑圧⁵には目をつむり、ひたすら母を理想化し続けた。

また母親の愛情は同時に、強い依存心をも作り出すことになった。フロイトは常に愛され賞賛されていなければ、抑うつ的な感情にとらわれるという不安定な人格に育った。彼は生涯、母の感心なお気に入りの息子であり続けたし、母の愛情を損なうことを恐れるが故にそうせずにはいられなかった。アマリエが90歳で死ぬまで、彼女はフロイトの人生の中心人物でありつづけた。

この依存心と不安定さは他の人との関係にもしばしば現れた。彼の妻や、年上の人や同年輩の人、また弟子達に対して、無条件の愛とか無条件の是認、賞賛、保護といった欲求を転移⁶させた。フロイトは無意識のうちに相手にこの欲求を抱き、満たしてくれている間は熱愛ともいえる関係を続け、相手が十分に

⁵ 抑圧はフロイトによって明らかにされた心の働きで、意識すると激しい深い苦痛、不快、不安が起こる心の内容を無意識の中に押し込んでしまう心の働きとして一般に理解されている。ところが、ドイツ語の Verdrängung は、座っていた席からその人を追い出し、そこに別な人が座る現象を意味する。つまり、ただ単に心の内容（本来の願望）を無意識に追い出すだけでなく、そこに別な心の内容（たとえばヒステリーの症状）を置き換えてしまう心の働きを含む。それゆえに、Verdrängung を英語では抑圧 repression と訳すことには疑問が生じる。

⁶ 転移とは、例えば患者が治療者に、現実の人物として以上のより幻想的なイメージを抱き、強い愛着を向けたり、不合理な憎しみや反抗心を向ける事で、これらの情緒や幻想は、実は幼いときの経験に関わっている場合が多い。また、治療者が患者に対して抱く同様の心的な現象を逆転移と呼ぶ。精神分析治療は、この転移の分析と逆転移の洞察を治療機序として展開される。

答えてくれなくなると関係を絶ち、その後憎しみまで抱くようになるといったことを生涯繰り返した。フロイトの生涯には常に愛する人と憎悪する人がいたのである。例えば大学で知り合い経済的な援助もしてもらった Josef Breuer(ジョゼフ・ブロイアー)、フロイトが手紙を通じて自己分析を行った事で知られている Wilhelm Fliess(ヴィルヘルム・フリース)や、フロイトとよく比較される Karl Gustav Jung(カール・グスタフ・ユング)などとの関係がそれにあたる。

少年時代と父との関係

フロイトが3歳になる頃までは一家は安定した生活を送っていた。やがて経済的な不況とユダヤ人迫害に見舞われて住み慣れたフライベルクの地を去り、破産同然の姿で Leipzig(ライプツィヒ)に引っ越した。それからさらに1860年フロイトが4歳のころには、一家揃って Wien(ウィーン)に移住した。機械の機織機によるやすい布が市場に出回るようになったので、父ヤコブの商売が苦しくなったためである。フライベルクは当時人口5千人ほどの小都市であった。住民は主としてカトリック教徒で、ユダヤ教徒もプロテスタント教徒もわずかに2パーセントを占めるにすぎなかった。このことはフロイトの父達がユダヤ人としてどのように迫害を受けてきたかを考えさせる。

それからのヤコブは羊毛を売って生活することになった。フロイト一家は子

たくさんであったので、狭い家に家族 9 人でひしめくように住み、その暮らしは決して楽なものではなかった。

フロイト少年は大変知的好奇心が旺盛な子供だった。1866 年 10 歳のときにウィーンにあるギムナジウムに入学した。2 年もかからずクラスで 1 番の成績になり、6 年間首席を通し、最優秀で卒業した。

またフロイトのいた 19 世紀末の Österreich(オーストリア)は、政治的に衰退し、惰性の力で君主政体を続けていた。公のイデオロギーと政治的現実の実体との食い違いのために、言葉やスローガン、権威的な論説を、事実誰も信用しないようになり、批判的精神が発達した。フロイトの場合はさらに、生活の不安定さというもう 1 つの要因が、この精神の発達を助長した。少年フロイトは、貧しさという切実な経験を通じて社会的な安定が政治的な安定と同様にほとんど信頼できないということを学んだ。そして伝統や因襲にとらわれた態度が、いかなる安定も信頼ももたらさないことを学んだ。

フロイト少年は、学校に行くようになったことから、他の少年の父親、先生と自分の父とを比較してみて、父ヤコブは「全知」どころか、むしろ貧しく、無教育なほうであるのを発見してしまった。フロイトは父の代わりに、先生達のうちに、賞賛すべき人、強力な人物像を見出すようになった。

フロイトと彼の父との関係は、母との関係とはまさに正反対であった。母は

彼を賞賛し溺愛し、兄弟の中で王様のように振舞わせた。一方攻撃的な性格でなかった彼の父は兄弟達に対し、母よりも明らかに公平な態度をとった。フロイトは父親に対して、表面的には従順な子どもとして成長した。

フロイトが7,8歳の頃、両親の寝室でわざと小便をしたことがあった。これは両親の寝室を手に入れたいという攻撃的な傾向をもつ象徴的な行為であった。またその攻撃は明らかに父親に向けられていた。父ヤコブは当然のことながら腹を立てて、「全くしょうのない奴になるだろう」と叫んだ。この言葉は息子をいつもひどく自慢し、息子を批判したり軽蔑したりする習慣を持たなかった全く攻撃的でない父親としての、むしろ穏やかな反応であった。しかしフロイトはこの言葉をいつまでも侮辱として記憶に留め、この言葉が私の野心の原因になったと語っている。

フロイトが12歳の頃聞かされた話しによって、父に対する優越的態度は新たに刺激された。父親が青年であった頃、道を歩いているとある男（非ユダヤ人）が彼を殴って帽子を払い落とし、「このユダヤ人め！道を譲れ！」と怒鳴ったという話しである。その時フロイトは憤慨して、おそらく期待を込めて「その時お父さんはどうしたの？」と聞いた。父親は「わしは車道に出て帽子を拾い上げた」と答えた。これ以来フロイトの父親に対する幻滅と、自分の方が優れているという優越感はいっそう強くなった。しかしヤコブのために弁解するなら

ば、当時のフロイトには分らなかったが、父親ヤコブの青年時代は、フロイトの少年時代よりもはるかにユダヤ人差別が厳しかったのである。

フロイトと彼の父親は母親の愛情を巡ってのライバル関係にあった。フロイトは父親に対し頼りがいのある偉大な人間であってほしいという期待と、母親をめぐってのライバルにいなくなってほしいというアンビバレンスを常に抱えていた。これは彼の全体系の中心的概念の1つである Ödipus-Komplex (エディプス・コンプレックス) を生み出すことにつながっている。

賢い我が子に対する両親の期待は大きく、それに比例するように、アマリエはフロイトへの溺愛を深めた。家中が彼の勉学を中心に回っており、ほかの子供達との待遇の差はあからさまであった。例えば狭い家に大家族でひしめくように住んでいたにもかかわらず、フロイトは自分専用の部屋を貰っていた。またすぐ下の妹 Anna (アンナ) がピアノの練習をする音がフロイトの勉強の妨げになるという理由で、彼女の大好きなピアノは両親の手によって家から放逐されてしまった。

フロイト少年は真面目で努力家であったので、17歳でギムナジウムを卒業するまでの6年間に、ギリシャ語とラテン語を完璧にマスターした。フランス語や英語も身につけ、さらにスペイン語やイタリア語も初歩程度ならわかるようになっていた。

大学時代とユダヤ人としてのフロイト

1873年にギムナジウムを卒業した後、フロイトはウィーン大学に入学した。人間の自然科学として医学部を選んだ。家は貧しかったけれども、フロイトの進路は彼自身の選択にまかされていた。20歳のときに、当時のウィーンにおいてC・R・Darwin(C・R・ダーウィン)の進化論と、Du Bois-Raymond(デュボア・レイモン)やHermann Helmholtz(ヘルマン・ヘルムホルツ)らの唯物論生命観を最も盛んに唱えていたErnst Brücke(エルンスト・ブリュッケ)[1819~1892]の生理学研究室に迎え入れられた。ここで五年間ウナギや蛙などの動物の神経構造の研究をした。また1881年には神経細胞と神経突起がまとまった1単位になっているという神経元理論の基礎となった着想を発表した。フロイトはこの研究室ではじめてブロイアーと出会った。ブロイアーはフロイトよりも14歳年上で、この時すでに開業医家として生計を立てつつも、研究家としてもすぐれた業績を挙げていた。

フロイトは大学に入ってから、明確なユダヤ人差別にはじめてさらされることとなった。フロイトの少年時代は、自由主義が勝利し、オーストリア・ハンガリー帝国で初めて何人かのユダヤ人大臣が政府に参画していた時代であった。その60年代には、1人の放浪詩人が幼いフロイトに向かって、この子はいつか輝かしい政治家の道を進むだろうと預言することも不可能ではなかったし、

フロイト少年も似たような野心を抱いていた。しかし時代は変わる。1873年⁷にはフロイトが抱いたような野心は砂上の楼閣となりはてた。自由主義は敗退し、ヤコブが息子の為に喜んだ よくなった時代 が終わりを告げた。そして政治的反ユダヤ主義に揺さぶられる一層悪い時代がやって来た。このなかでフロイトは将来の希望に満ち、ギムナジウムで享受してきた権利の平等を今なお信じ込んで大学に入学していた。

しかし大学でフロイトが目にしたものは、それまで組織化された形態では知られていなかった反ユダヤ人主義運動が学生団体を侵食している姿である。ユダヤ人の青年達は戦うか、或いは孤立に甘んじて生き屈辱的な排斥や議論を避けるかのいずれかを余儀なくされた。周囲の人達の自由主義的な幻想に慣れてしまっていたフロイトには、れっきとした教育を受けた世界でこういうことがあり得るとは信じられず、大きな衝撃を受けた。フロイトは当時のことを「ユダヤ人であるために、ウィーン大学での学生生活のあいだでも自分は嫌と言うほどの色々の不当な待遇を受けた」(『フロイト』世界の名著 60 P. 12より引用)と語っている。この経験によってフロイトは自分が ユダヤ人 であるこ

⁷ 1873年はGeorg von Schönerer(ゲオルク・フォン・シェーネラー)が、オーストリア議会に選出された年である。彼は左派の反ユダヤ主義者で、民族主義と激しい反資本主義とを結びつけた最初の人物であった。

とを強く意識するようになった。しかしそれはフロイトが ユダヤ人 らしくあろうとした、またはユダヤ教的であろうと努めたという意味ではない。

フロイトは脱ユダヤ化⁸したユダヤ人である。つまり彼の場合はドイツ化したユダヤ人であるということになる。実はフロイトの心情の奥底には ドイツ的なもの が深く深く根を下ろしていた。生まれた時から語る言葉、読み書く言葉はドイツ語である。しかもフロイトのそのドイツ語による文筆の表現力は、ドイツ文学最高の荣誉であるゲーテ賞を受賞したほどであった。つまり彼はユダヤ人でありながら、ユダヤ教的なヘブライ語やイディッシュ語に関心を持たず、ドイツ語で学びドイツ語で思考し、ドイツ語で表現することしかできなかったという意味で、完全にドイツ（語）化したユダヤ人であった。

さらにフロイトは彼の生まれ育った当時のウィーンにおける啓蒙期の合理主義的な時代精神に同一化することによって、ユダヤ教的な偏見や因襲から自由になっていた。妻マルタの実家ベルイナス家の律法主義と激しい対立をしたほどである。

⁸ 脱ユダヤ化：I・Deutscher（I・ドッチャー）著『非ユダヤ的ユダヤ人』によると、脱ユダヤ化とはユダヤ人固有の人種的・宗教的偏見や因襲にとらわれず、より普遍的なものに同一化する努力のことであり、それはまたディアスポラ（世界各地に散在して暮らすユダヤ人）の人々に共通の傾向であるという。そもそもユダヤ人という言葉はユダヤ教を信じる人々の総称であり、ユダヤ民族というものが存在するわけではない。

死の間際になるまでウィーンに残り、ぎりぎりになるまで、Johann Wolfgang Goethe (ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ) を生み出したほどの優秀なドイツ民族が Adolf Hitler (アドルフ・ヒトラー) をのさばらせるはずがないと確信していたのも、ドイツ語人間のフロイトにしてみれば、まことに無理からぬ心情であった。

その一方でフロイトは、ユダヤ人に迫害的態度をとるウィーン人やオーストリア政府に対する敵対意識を隠そうとはせず、迫害には断固として戦う誇り高いユダヤ人の一面も兼ね備えていた。例えば、すでに精神分析の創始者として、国際的名声を得ていた 57 歳のフロイトに対して、ウィーンの税務署が「あなたの名声ははるか国境を越えて広まっているのに、それにしては収入が一向に増えてないようだが？」と言ってきたとき、フロイトは痛烈な返事を書いた。曰く「政府が（ユダヤ人である）私を何らかの形でお認めになったのは、これが初めてであります。この点に対して感謝いたします。」と。さらに「政府は、私の名声が国境を越えて広がっていると書いていますが、正確には私の名声は、国境のあるところから（つまりオーストリアの国境を越えた所から）初めて認められているのであります。」と皮肉な抗議を付け加えた。

開業と結婚、そしてフロイトの死まで

1881 年にフロイトは、学位を得てウィーン大学の医学部を卒業した。しかし

ブリュッケの研究室への出入りは続けていた。フロイトは全部で7年間ブリュッケの研究室に留まっていた。本当はブリュッケの助手になりたかったが、大学に存在するユダヤ人差別がそれを許さなかった。

1882年フロイトが26歳のとき、Marta Bernays（マルタ・ベルナイス）というユダヤ人の女性と出会って一目惚れをし、翌年には婚約をした。ブリュッケの研究室に留まっていたのでは、家族を養うだけの収入が得られる見込みは全くなかったため、仕方なく研究職を諦めた。そして開業するための準備として臨床医学を学び、ウィーン総合病院で3年間医師としての経験を積み、神経病医としての資格を取った。この間、婚約者マルタは種々の事情から、ウィーンを遠く離れたHamburg（ハンブルク）に居住しており、婚約期間4年3ヶ月のうち丸3年間にわたって離れ離れになっていた。その3年間のあいだにフロイトは、マルタ宛てに9百通以上の手紙を書き送っていた。その手紙にはフロイトのマルタへのあふれんばかりの愛情と、マルタの周囲の人々に対する激しい嫉妬が読み取れる。ほぼ全てが今なお現存し、生々しい人間フロイトの研究の貴重な資料になっている。

1885年にはウィーン大学の神経病理学の私講師に任じられた。しかしこれは無給であったので、フロイトは貧乏生活から抜け出すことはできなかった。1885年から翌年まで奨励金を得て、Paris（パリ）のNervenlinik Salpêtrière(サルペ

トリエール精神病院)に留学し、偉大な神経学者 Jean Martin Charcot(ジャン・マルタン・シャルコー)[1825~1892]のもとで学んだ。シャルコーは神経学の分野で大きな業績を残しているが、同時に催眠治療の先駆者であり、ヒステリー研究の専門家でもあった。彼は通称「神経症のナポレオン」と呼ばれている。フロイトはシャルコーのヒステリー研究に触発されて、神経組織の器質疾患とは全く異なる神経症の問題に関心を抱いた。フロイトは彼のもとで、精神的な原因でおこる病気や神経症の研究と治療を行った。

ヒステリーという病名は子宮を意味するギリシャ語に由来する。古代には子宮が体内を移動することによって引き起こされる病気だと考えられていた。中世になると、悪魔の仕業だとされた。この時代にもまだ謎の病気で、子宮が脳に問題があるとされていた。シャルコーは神経組織の器質疾患から生じる麻痺と、ヒステリー性つまり「神経症」的麻痺の区別を見分けるために催眠の研究を行っていた。その中で催眠によって人工的に麻痺を引き起こすなどし、さらに催眠暗示を用いれば麻痺を治療することができるとしていた。実験後、患者は催眠中のことを覚えていなかった。この催眠実験を通じてフロイトは、無意識的に起きた心理過程が行動に大きな影響を与えうる事を学んだ。パリから帰ったフロイトはシャルコーのもとで学んだことを医師会に報告することになった。「男性にもヒステリーはある、暗示によってヒステリー性麻痺を引き起こす

ことができる」という彼の主張は、全く受け入れられなかった。

1886年30歳の時に、彼はウィーンの市庁舎わきのアパートの一室を借りて開業し、その年の9月13日に長きにわたった婚約生活を終わらせ、ようやくマルタと結婚することができた。

フロイトはシャルコーのもとで学んだことを生かし、神経症患者の治療に催眠を用いることにした。ただしフロイトは、「あなたはきっと健康になりますよ」という暗示を植え付けるための手段としてのみ催眠術を用いたのではない。催眠のより重要な側面は、フロイトの友人であり同僚であったブロイアーの観察から導き出された。有名な患者 Anna Otto (アンナ・オットー)⁹を催眠によって治療した際、患者があるヒステリー症候があらわれた最初の瞬間を思い出し、その時の感情を再体験することが出来れば症候がきえる、という事実に気がついた。ブロイアーはこの治療法を「浄化法」と名づけた。このようにして催眠は、患者にある特定の症候の忘れられた起源を思い出させるための手段と

⁹ アンナ・オットー(仮名)は精神分析学史上最も有名な患者である。様々な神経症を抱え、ヒステリー研究の宝庫とさえ呼ばれた。普段の彼女は知能が高く、人並みはずれた教養と才能の持ち主で、直観力にも優れていた。また心が優しく、慈善活動に打ち込んでいた。後に先駆的なソーシャル・ワーカーとなり、婦人参政権運動の闘士となった。ドイツでは彼女をたたえる記念切手が出たこともある。

して用いられるようになった。催眠は暗示によって、症候を直接に攻撃するのではなく、1つの研究手段となった。

だが催眠というものは、容易にかかる人とそうでない人がいる。もし、患者を催眠状態に導くことが出来なければ、医師は非常に気まずい立場に立たされる。医師の権威が失墜してしまうからである。そういうわけでフロイトは次第に催眠を治療に用いなくなる。代わりに抑圧された過去の体験や記憶を意識化するために、患者に全く自由に連想してもらおうという方法（自由連想法）を考え出し、後にこれを精神分析療法と呼ぶようになる。まず何らかの単語を患者に聞かせ、それから連想された言葉をいわせる。一般常識からは考え難いような言葉を連想してしまった場合や、連想までの時間が異常に長かったり短かった場合、そこに何らかの問題があると推定されるのである。

さらには、自由連想法の中で患者の連想が止まり、何も頭に浮かばない状態に陥ることがある。その観察からフロイトは精神分析における「防衛機制」という概念を提起した。無意識を意識化することに意識が抵抗する結果、連想が続かなくなる。この抵抗を分析することで、無意識的な心の過程を明らかにすることができると思った。こうして現代的な精神分析的な治療法が出来あがっていった。

フロイトの仕事は最初のうちは、あまり上手くは行かなかった。必ずしも患

者が治療費を払ってくれたわけではなかったのに、収入がなかなか増えなかった。しかしそのうちに口コミによって「フロイト先生の新しい治療法」のうわさが広がり、金持ちの患者が増えたので、しだいに暮らし向きが良くなっていった。そこで彼は通称「贖罪の家」¹⁰という高級マンションに移り住んだ。フロイト夫妻はここに五年間住み、1887年に長女 Matilde (マティルデ)、1889年に長男 Jean-Martin (ジャン マルティン)、1891年に次男 Oliver (オリバー) が生まれた。1892年に次女 Sophie (ゾフィー) が、そして1893年に三男 Ernst (エルンスト) が誕生した。最後に三女 Anna (アンナ) [1895~1982] が誕生した。子ども達のなかで末子のアンナだけが、フロイトと同じ道を選んだ。次男が生まれた頃手狭になったので、1891年に Berggasse (ベルクガッセ) 19番地に居を移した。以後はロンドンに亡命するまでほぼ50年間、ここがフロイトの仕事場であり住まいとなった。フロイトの治療では、患者は1週間のうちに何度もフロイトのもとを訪れ、その治療は何年も続く場合があった。そのためフロイトは亡命するまでほとんどウィーンから離れずに生涯を過ごした。

¹⁰ 贖罪の家：正式には帝国基金ビルという。以前そこにはリング劇場という建物が建っていたのだが、建設から8年目に全焼した。その時に火事そのものよりも集団パニックが原因で400人近い犠牲者がでた。跡地に死者を弔うために教会とマンションが建てられた。その経緯から「贖罪の家」と呼ばれる。フロイトはわりと迷信を信じていたようだが、このビルと縁起が悪いとは思わなかったようだ。

2 - で述べたフリースという人物は Belin (ベルリン) で開業している耳鼻科医で 1887 年からブロイアーを介して交際を始めた。1890 年からブロイアーと共同研究を始めたがその研究が終わり、共著として 1893 年に『ヒステリー現象の心的機制について』、1895 年に『ヒステリー研究』を出版すると、フロイトはブロイアーと完全に決裂してしまう。だが、そのかわりにフリースと極度に密接した関係を持つようになる。1896 年にはフロイトの父ヤコブが死去し、それを契機にフリースとの間に手紙を通じて自己分析を進めるようになる。

この自己分析は 2 つの役割を担っている。1 つはこの自己分析を通じてフロイトがエディプス・コンプレックスを発見したことである。エディプス・コンプレックスの基本テーマは、異性の親に対する近親姦の願望と、同性の親に対する競争、憎悪、親殺しの願望であり、またこれらの願望に対する罪悪感である。これらはフロイトという一個人の心の深層を、自己洞察をすることで発見されたが、実はフロイト 1 人のものではなく、むしろ人類全ての 1 人ひとりの心を揺り動かす普遍的な願望であり、人間誰もが抱く普遍的な罪悪感であると、フロイトは考えた。そしてその普遍性の証を、古代ギリシャの Sophokles (ソフォクレス) の悲劇『Ödipus (エディプス王)』に見出したので、「エディプス・コンプレックス」と名づけた。また女性の場合には「Elektra Komplex(エレクトラ・コンプレックス)」とも言う。

さらにフロイトはエディプス・コンプレックスには、陽性のものと陰性のものがあるという。陰性のものは同性の親に愛情を抱き、異性の親に憎しみを抱く心的布置のことである。この2つは種々の度合いで併存している。陽性が陰性のものを凌ぐ場合には、その人は異性愛的な志向を持ち、適応性のある大人になる。陰性のものがより強い場合には、たとえば父親に受け身的でその愛情を受けたいという同性愛的な志向が続き、その後の愛の対象選択に影響を与え、ひいては神経症の要因になることがある。

そしてエディプス・コンプレックスに固着している男性は母親に固着し、女性なら父親に固着し、自分の異性の親と似た人物を愛の対象に選ぶ。この理論はマザー・コンプレックス、ファザー・コンプレックスとして一般化され、現代の人々にとってすっかり馴染み深いものとなっている。最近ではエディプスに向けた子捨て、子殺しの衝動、それに伴う虐待された子供としてのエディプスの運命が、研究のテーマになっている。

さらにフロイトはエディプス・コンプレックスから「Verlustangst (去勢コンプレックス)」という概念を提起した。それは男の子が親から去勢への脅かしを受け、去勢不安を抱き、さらに、女性の性器を見て、それを去勢されたためにペニスのない状態として認識した場合、その去勢不安はさらに深刻な去勢恐怖となる。この一連の心的な過程の結果抱かれるのが、去勢コンプレックスで、

去勢されたという幻想のなかで起こるエディプス葛藤の抑圧とそれに伴う劣等感や無力感を伴う。女の子の場合、ペニスがないという去勢コンプレックスから、ペニス願が始まる。フロイトは「男の子ではエディプス・コンプレックスは去勢コンプレックスによって終わり、女の子では去勢コンプレックスによって始まる」(1909年『5歳の男児の恐怖症の分析』より)と語っている。この女性論にはフェミニズムからの活発な批判がある。

2つ目の役割は、父ヤコブの死を悼む喪の心理を、自己分析のなかでたどる体験が、のちにフロイトが *Trauerarbeit* (喪の仕事) と名づける営みそのものであったことである。喪の仕事はあるいは悲哀の仕事とも言われる。急性の不安や当惑、喪失への抗議と否認、喪失を認めて陥る抑うつと絶望、古い対象からの離脱、新しい対象の発見の4段階に区分される。一般に喪とはこのような一連の心のプロセスを示し、悲嘆は対象喪失によって生じる悲しみの情動をいう。喪の仕事は失った対象に対する再生、アンビバレンスに由来する悔やみ、罪の意識、償いなどの体験をたどり、その対象をよい対象として内在化するが、その対象からの離脱が可能になるまでの心の作業をいう。

さらに対象喪失とは愛情や依存の対象を失う体験で、実際の親、夫婦などを死などによって失う外的対象喪失と、美化、理想化していた対象に幻滅することでその対象を心的に失うなどの内的対象喪失が区別される。

この自己分析の内容は、大半が『Traumdeutung (夢判断)』(1900年)に発表されたとはいえ、さらにそれに続く著作を経て、『Trauer und Melancholie (悲哀とメランコリー)』(1917年)に至るまで、フロイトの研究と著作の多くが「喪の仕事」そのものであった。フロイトは人の目に留まるだろうと思って、『夢判断』という題名をつけたのだが、彼の予想に反して売れ行きは芳しくなかった。夢判断とは、顕在夢の仕事の背後に隠された潜在思考の意味を読み取る作業のことである。この夢判断の方法には、夢を個々の要素に分解し、それぞれについて自由連想をとるという連想法と、その夢の類型的な象徴性を読み取る類型的な方法があるが、フロイト独自の夢判断の方法は前者である。夢の潜在思考は検閲を受けて意識可能な夢の視覚像に圧縮、置き換えを受けるが、この作業が「夢の仕事」である。夢判断はこの夢の仕事を逆行する営みである。

当初フロイトの理論は、汚らわしく下賤な理論であるとして、ドイツ圏の医学会には全く受け入れられなかった。しかしフロイトは精力的に、精神分析の活動を続け、次第に理解者を増やしていく。1902年からはその理解者たちと「心理学水曜会」と呼ばれる会合を開くようになる。1908年にはこの会合は「ウィーン精神分析学協会」と名前を変える。

フロイトの精神分析は国内よりも、むしろ国外で高く評価されるようになっていった。1904年には Schweiz (スイス) の Zürich (チューリッヒ) にあるブル

クヘルツリ精神病院院長 Eugen Bleuler (オイゲン・ブロイラー) とその部下であったユングが、フロイトの精神分析学の理論に賛成を公表した。2人ともフロイトの理論を、自らの説に積極的に取り入れていった。この時にはフロイトは、あれほどべったりだったフリースとの関係が完全に終わってしまっていたので、ユングと生き投合し、フリースの代わりに密接な関係を築くようになった。この交際は1906年から1913年まで続いた。

フロイトは常々、精神分析学がユダヤ人特有のものともみなされ、非ユダヤ人から「あれはユダヤ人しか当てはまらない。我々には関係ない」と言われ、無視されることを恐れていた。だから、ゲルマン人のキリスト教徒であり、かつ世界的に有名な精神病院の医師であるユングの支持を得られたことは、フロイトにとって大きな意味を持っていた。

かくして、ユングはフロイトを父親のように慕い、一方フロイトはユングを息子のように可愛がり、ひいては彼を精神分析運動の後継者にするつもりだった。ユングが自分の跡を継いでくれれば、精神分析は、ヨーロッパのアカデミックな精神医学の世界にも正当な評価を得ることができる。そしてユダヤ人の学問という偏見から解放されて、「ユダヤ人」、「アーリア人」といった民族や人種の差別を超えて受け入れられるようになるにちがいないと、フロイトは考えていた。1910年に「国際精神分析学協会」を創立した時、フロイトはユングを

初代会長に据えた。しかしそれはフロイトのユングに対する偏愛を、嫉妬と共に苦々しい思いでみていたフロイトの弟子達の反発を買った。さらには1913年にはユングと決別してしまったので、ユングを後継者にとというフロイトの学会政策は挫折したのであった。

フロイトは1920年66歳の時に、口腔内の異常に気づいた。やがて上顎癌の診断が下され、死去するまでに33回もの手術を受けたることになった。1920年から1939年に没するまで、フロイトは人並みはずれた強靱な意志をもって、癌とその痛みとの壮絶な闘いを続けた。フロイトが癌で段々体が弱っていくなかで、フロイトの名声は次第に高まってゆき、ウィーンの人々も彼をを無視することができなくなった。1924年にウィーン市議会はフロイトに、名誉市民にあたる市民権を贈った。また1930年にはゲーテ文学賞を受賞した。同じ年に母アマリエが亡くなり、フロイトは悲嘆の底に沈むことになる。

1932年頃から、ナチスのユダヤ人迫害が激しさを増した。1938年にはオーストリアに侵入したナチスのゲスターポが、病床についていた81歳の老フロイト宅を2回にわたって家宅搜索し、最愛の娘アンナを拉致した。彼女は翌日には家に帰されたが、そのことにショックを受けたフロイトはとうとう亡命することを決意した。そして1939年9月23日83歳の時、亡命先のLondon(ロンドン)でその生涯を終えた。

3 . フロイトの理論とその発展

フロイトは、その長い医師生活の間に精神分析治療の技法原則¹¹といわれるものを作り出した。彼は「医師としての分別」¹²をきちんとわきまえた健全なモラルの持ち主であった。患者達との静かな、そして、謙虚で着実な歩みを生涯にわたって休むことなく続けた。幼い頃に培った啓蒙精神に支えられたフロイトの強靱な人生は、患者達のつまりは未解決な依存心や意志の弱さによって病苦の虜となった人々にとって、大きな治療力となった。

フロイトの思想の真髄は、彼の膨大な著作、論文に表現された理論、学説の中にあるのではない。フロイトの思想は、一臨床家として患者と共に仕事をするという、きわめて実際的な治療的実践や働きかけがもとになっているからで

¹¹ 例えば訓練分析・自己分析である。精神分析の専門家になるために必要な教育研修の方法で、国際精神分析協会が認定した訓練分析家による1回・50分週・4回・2年以上の訓練分析が原則である。訓練分析は教育分析とも呼ばれる。フロイト自身、フリース体験の中で医師フリースを訓練分析者とみなして自己分析を展開し、ある種の訓練分析を受けたのと同じ心の体験と洞察を得た。また、この過程で得られる自己を洞察していく自己分析の方法は、訓練分析が終わった後も終わりなく続けられていく。同じ事が、治療としての精神分析を受ける体験にも当てはまる。

¹² 治療者としての分別のことで、治療契約を遵守すること、分析の隠れ身を保ち中立性を守り、治療内の秘密を厳守すること、患者を私的な願望や要求の対象としないこと、患者も治療者も、一定の禁欲を互いに守るべきであるとの禁欲規制、患者の自発性と真実性を最尊重する分析家の受け身性などのことである。

ある。フロイトの思想の核心は、彼自身の創始した 精神分析療法 という臨床家として働くことの中にある。

一社会人としてのフロイトは、ウィーン大学卒業後から 83 歳で没するまで、平凡な市民として家庭と家族を守るために、そして開業医として生活の糧を得るために、その生涯の大半を働き続けなければならなかった。しかし、その働くこと = 治療という仕事を通じて、自己自身と患者がともによりよく生きることができるようになる。そこにフロイトは働くことの信条に思想的な価値を付与し、人間主義的な意義を見出していた。そしてこの営みに精神分析療法を行う精神分析家という形を与え、自らの精神分析的アイデンティティ¹³を確立していった。

フロイトについては、無意識の発見とともに「汎性欲説」が有名である。フロイトは性欲の概念を拡張し、子どもも性欲があると主張した。さらに性本能が、無意識生活を動かす基本的な動因とみなした。フロイトの唱えたこの「小

¹³ 同一性とも訳される。自己が常に同一な存在であるという内的な体験としてのアイデンティティという意味があるとともに、E・H・Erikson (E・H・エリクソン) が規定したアイデンティティの概念は、自己自身による主観的な自己定義だけではなく、身分証明書にたとえられるように周囲や社会がその自己定義を承認し、評価する客観的現実性を持つ自己をいう。家族、社会、歴史、民族、集団への所属との関連で用いられる。これらの「
としての自分」を統合するのが自我同一性である。

「小児性欲論」は性欲の概念の革命であり、当時の人々に衝撃と反発を引き起こした。フロイトはそれまで人々が同義的に考えていた「性的なもの」と「性器的なもの」を区別し、「性的なもの」を「性器的（生殖的）でない性的なもの」にまで拡大したのである。

一般に「性的」「性欲」「性愛」という言葉を使う時、人々は暗黙の内に大人の性欲を思い浮かべる。性器的な性行為として性欲をイメージする。ところが実際には、小児の母子関係をよく観察すると、そこには豊かな「性的」な快と満足の営みがあり、その代表が、乳児の母親への愛着現象＝口愛である。フロイトは、乳児が母親の乳房を求め、吸いつき、母親にしがみつく口愛行動をとるとき、口唇・舌・その周辺の皮膚から得られる快感を得ようとするため、決して乳という栄養物を摂取するためだけではない、としている。このような口愛欲求の発見は、フロイトの「小児性欲論」の源泉となり、乳児の母親への愛着に関する現代の発達心理学を導き、方向づける指針の役割を果たすことになった。

フロイトは「子児性欲論」で、性的であることと性器的であることを区別したが、さらに前性器的な発達段階として、口愛期、肛門期、男根期という精神的発達の各段階を明らかにした。男根期にはいるとエディプス葛藤が高まるが、エディプス・コンプレックスの抑圧とともに、これらの前性器的な欲動も

一度抑圧されて潜伏期に入る。思春期での性愛の生物学的成熟とともに、幼児性欲の発達が再現される。これを2相説という。思春期になってこれらの前性的な発達は性器統裁によって統合されて、成人の性的活動の中に位置付けられる。このとき性器統裁が上手く行われないと、性倒錯に陥ることがある。

フロイトは、性倒錯として「サディズム（他虐趣味）」、「マゾヒズム（自虐趣味）」、「露出狂」、「窃視症（のぞき趣味）」、「アナルセックス（肛門性交）」、「フェティシズム（手、足、髪の毛、下着や靴、あるいは皮製品にたいする異常なまでの執着）」などを挙げている。これらの性倒錯は、今日では誰にでもわかりやすい倒錯行為として理解されている。

しかしフロイトの「小児性欲論」には、大きな問題点があった。彼は子どもの発達を内的な過程とだけみなしていた。幼児にとって母親というものが、感情的に交流する存在あるいは学習のための刺激や機会を与える存在であるという視点が欠けているのである。フロイトは晩年になるまで、幼児と母親との関係の重要性に気が付かなかった。アンナ・フロイトはフロイトの後継者となり、この関係をよく研究し、「児童精神医学」にとって最も重要な人物になった。具体的には、アンナ・フロイトは乳幼児の母に対する愛着をアタッチメントと名づけ、この愛着が満たされることが心身の成長に必須の条件であり、一度形成された愛着の母性剥奪は子供にさまざまな心的な外傷を与え発育上の歪みを作

り出すとした。さらに現代では、アンナ・フロイトの理論を受け継いで、安全な基地、不安性愛着、成人の愛着面研究（AAI）、内的ワーキングモデルなど、愛着について、精神分析的な発達論と発達心理学の出会いの中で系統的な研究が続けられている。

1923年、フロイトは『自我とエス』という『心的構造論』に関する論文を書き、人間の根源的な欲動を代表するイド（ドイツ語でいうe s）、欲動の満足に対して内的な規範としての機能を果たす超自我、この両者の葛藤を調整し、欲動に対する抑制や抑圧の防衛機能を営み、さらに、外界の現実に対応する適応機能を担う自我の働きを定義した。

つまりフロイトはIchという言葉に2つの意味に用いていた。1つは、「Ich」人格の主体としての「私」である。もう1つは、自我・イド・超自我という心的構造論システムの中で内的葛藤を処理し、外的な現実に対応するシステム自我という意味である。自我心理学ではこのシステム自我を、さらに、葛藤を処理する防衛の主体としての自我と、思考・認識・言語・知的機能を葛藤の領域外にあって営む自律的な自我とを区別している。

また精神分析では、心の働きの主体としての自我と、むしろそれより身近な体験に近い意識される自己を区別しているが、自己及び自己愛の発達とその病理を研究する流れを自己心理学と呼ぶ。さらに、自己の全体を認識するヒト

特有な自己認識の構造について、フロイトの自己鏡像論がある。また自己に対して愛着を持つことを、自己愛という。フロイトはそれを池に映った自己像に恋焦がれたギリシャ神話のナルシサスを引用して、「Narzissmus (ナルシズム)」と名づけた。さらにフロイトは、もっとも根源的な1次的自己愛と、1度発達してから退行して生ずる2次的な自己愛を区別した。そこからさらに、現代の自己心理学では、特別に肥大した誇大自己の持ち主は人並み以上の自己愛を満たしていないと、深刻な傷つきと怒りを体験するという自己愛パーソナリティ障害が研究されている。

4 . 考察

フロイトはその生涯において、膨大な数の論文、著作、書簡を書いた。ここで述べたのは、その中のほんの一部分に過ぎない。フロイトは創意にあふれる独創的な思想家であり、人々の考え方に革命的な変化をもたらした。現代に生きる私達も、フロイトの思想の多大な恩恵を受けている。フロイトの考え出した理論に、たとえどれほどの間違いが発見されようとも、それが人間という存在の謎に理解を深めたことに変わりはない。またフロイトの理論には、現代の精神分析学者にとって、肯定しがたい点があいくつもある。しかし精神分析学が、「フロイトから始まった」ということは、誰もが認めることである。

5 . Sigmund Freud : Der Vater der Psychoanalyse.

Im ersten Kapitel schreibe ich über den Einfluss von Sigmund Freud in unserer Zeit. Das zweite Kapitel beschreibt sein Leben. Im dritten Kapitel schreibe ich über seine Theorien. Im vierten Kapitel schreibe ich meine Gedanken.

Am 6. Mai 1856 wird Sigmund Freud als Sohn des Juden Jacob Freud und dessen ebenfalls jüdischer Ehefrau Amalia in Freiberg geboren. Die Familie Freud zieht 1860 nach Wien um.

Von 1873 bis 1881 studiert Sigmund Freud Medizin an der Wiener Universität. Von 1876 bis 1882 hat er eine Forschungstätigkeit am Wiener Physiologischen Institut. Und 1881 macht er die Promotion in Medizin am 1881. Dann hat er eine Anstellung am Allgemeinen Krankenhaus in Wien. Damals ist er an der Entdeckung der schmerzstillenden Wirkung des Kokains beteiligt.

1885 bekommt er die ärztliche Qualifikation in Neuropathologie in Wien. Dann ist er Dozent für Neuropathologie an der Wiener Universität und beschäftigt sich mit hirnanatomischen Forschungen. An der Pariser Nervenlinik Salpêtrière beobachtet er Frauen mit seelischen Erkrankungen.

Freud verlobt sich mit der Jüdin Martha Bernays 1882. Er hat eine vierjährige Verlobungszeit. Dann heiratet seine Verlobte. Und er eröffnet eine neurologische Praxis

in Wien.

Gemeinsam mit Josef Breuer bringt er die "Studien über die Hysterie" heraus. Darin stellt er die Methode der freien Assoziation vor. Er formuliert in einem Brief an Wilhelm Fliess nach selbstanalytischen Betrachtungen den "Ödipus-Komplex". Er schreibt über seine Verliebtheit in seine Mutter bei gleichzeitiger Eifersucht gegen den Vater und hält sie für allgemeingültig.

1900 bringt Freud "Die Traumdeutung" heraus. Er schreibt über die grundlegenden Begriffe der frühen Psychoanalyse. Im nächsten Jahr beschäftigt er sich in "Psychopathologie des Alltagslebens" mit der Bedeutung von Vergeßlichkeit und Versprechern.

1902 erhält er die Professur für Neuropathologie an der Wiener Universität.

Er gründet das "Zentralblatt für Psychoanalyse" und die "Internationale Psychoanalytische Vereinigung". Auf seinen Vorschlag wird Carl Gustav Jung zum Präsidenten gewählt. Dann gründet er den "Internationalen Psychoanalytischen Verlag".

1923 wird bei Freud Krebs diagnostiziert. Bis zu seinem Tod muß er sich 33 Operationen unterziehen. 1930 erhält er den Goethepreis der Stadt Frankfurt. Und er stirbt in London am 23. September 1939.

6 参考文献

- ・『フロイト』 Anthony Storr (アンソニー・ストー) 著 鈴木晶訳 東京 講談社 1994年
- ・『フロイトとユング 精神分析運動とヨーロッパ知識社会』 上山安敏著 東京 岩波書店 1989年
- ・『フロイト』世界の名著 60 懸田克躬責任編集 東京 中央公論社 1978年
- ・『フロイト 著作と思想』 宇津木保 鑪幹八郎 佐藤紀子 大橋秀夫 大橋一恵 福島章著 東京 有斐閣 1978年
- ・『フロイトの使命』 Erich Fromm (エリッヒ・フロム) 著 佐治守夫訳 東京 みすず書房 2000年
- ・『フロイト思想のキーワード』 小此木啓吾著 東京 講談社 2002年
- ・『現代の精神分析 フロイトからフロイト以後へ』 小此木啓吾 東京 講談社 2002年
- ・『図説 フロイト 精神の考古学者』 鈴木晶著 東京 河出書房新社
- ・『神なきユダヤ人 フロイト・無神論・精神分析の誕生』 Peter Gay (ピーター・ゲイ) 著 入江良平訳 東京 みすず書房 1992年
- ・『エディプスからモーゼへ フロイトのユダヤ人意識』 Marthe Robert (マルト・ロベール) 著 東宏治訳 京都 人文書院 1977年
- ・『エディプス・コンプレックス論争～性をめぐる精神分析史～』 妙木浩之 東京 講談社 2002年
- ・『フロイト入門』 Robert Waelder (ロバート・ウェルダール) 著 村上仁訳 東京 みすず書房 1975年
- ・『フロイトとユング上・下』 Robert S. Steele (ロバート・S・スティール) 著

久米博 下田節夫訳 東京 紀伊国屋書店 1986年

- AERA Mook 『精神分析学がわかる。』 Asahi Simbun Extra Reprt&Analysis
Special Number43,1998 東京 朝日新聞社 1998年

6 参考ホームページ

- <http://www.d4.dion.ne.jp/~yanag/kora6.htm>
- <http://www.ffortune./social/people/seiyo-mod/freud.htm>
- <http://www08.u-page.so-net.ne.jp/sc4/yukiyasu/history1.html>
- <http://www.dhm.de/lemo/html/biografien/FreudSigmund/>